

オリエンテーション

<2008年度・講義予定>

— OCWの授業計画表（授業スケジュール）とは一部表記が異なっています —

オリエンテーション	本日
I：宗教現象としてのキリスト教	
序論：キリスト教の現在—アジアを中心に—	17
第1講：キリスト教学の課題と方法	24
第2講：意味の問いとしての宗教	5/8
第3講：信仰と自己同一性	15
第4講：聖なるものと人格神	
1：宗教類型論と人格神	22
2：オットーの聖なるもの	29
3：エリアーデとヒエロファニー	
第5講：宗教的象徴と宗教言語	6/5
第6講：儀礼と sacrament	12
第7講：聖書を読む	
1：正典論と靈感説	19
2：近代聖書学とその意義	
第8講：現代聖書学の動向から	
1：イスラエル民族の起源	6/26
2：聖書の構造分析	7/3
3：神の国と終末論	10
II：キリスト教思想史の諸問題	
序論：宗教思想研究への招待—宗教と科学の関係史—	10/2
第1講：聖書の思想世界と科学	
1：創造論の諸問題—創造と契約—	9
2：知恵と終末	16
第2講：古代キリスト教	
1：ヘレニズム世界のキリスト教—「無からの創造」論—	23
2：キリスト教神学の成立とその諸問題	30
第3講：中世キリスト教と宗教改革	
1：自然神学と12世紀ルネサンス	11/6
2：宗教改革とガリレオ裁判	13
第4講：近代世界とキリスト教	
1：ニュートンとニュートン主義の自然神学	20
2：啓蒙的近代とキリスト教	27
3：進化論論争をめぐって	12/4

第5講：科学技術とキリスト教

1：生命と環境

11

2：心と情報

1/8

学年末試験

試験期間中

<講義の目的・ねらい>

前期の講義のテーマは、「宗教現象としてキリスト教」であり、キリスト教という宗教についての基礎的な内容の理解をめざす。そのために、現代宗教学論の方法に基づいて、キリスト教についての学問的な分析を行う。

後期のテーマは、「キリスト教思想史の諸問題」であり、今年度は、キリスト教と科学（自然科学）の関係をめぐる思想展開を歴史的に概観し、その上で、現代の諸問題（生命、環境、情報、心）について考察を行う。

以上によって、キリスト教とはどのような学問であり、どんな研究を行っているかについて、基本的な理解が可能になるものと思われる。

1. キリスト教の全体像についての概説・入門

「キリスト教とは何か」を具体的に明らかにする

2. 宗教研究の三つの立場との比較

現代宗教学／宗教哲学／神学 → キリスト教

3. キリスト教を学問的に研究する諸研究の総体としてのキリスト教

宗教研究の三つの立場すべてを総合することの必要性

他者理解・異文化理解のために

↓

二つのアプローチ：客観的分析＋主体的自己表現

現象

思想

前期講義

後期講義

4. 現代人にとってのキリスト教の積極的意義（とくに倫理的諸問題に対して）

キリスト教思想はどんな可能性を提示してくれるか

<受講の注意>

1. 現象の客観的分析から出発する。そのために、先入観・偏見（知識の過剰と過小）に気をつける。

現代人にありがちな偏見

宗教は非科学的か？

キリスト教は西洋の宗教か？

キリスト教は一神教か？

「一神教は好戦的・排他的で、多神教は平和的・寛容的」？

3. キリスト教に関する予備知識はとくに要求されないが、積極的かつ主体的な受講態度が期待される。とくに、自分自身の問題関心（研究テーマ）との関連に注目することが大切。

4. 成績評価に関して：

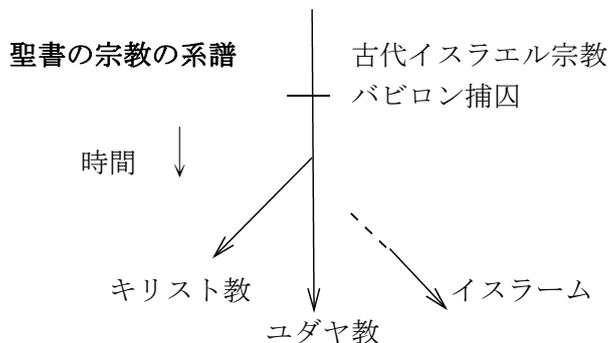
レポート（夏季休業期間に前期講義の内容に関して）と筆記試験（学年末の試験期間中に後期講義の内容に関して）とによって総合的に評価する。

5. 「オープン・コースウェア」 (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/jp/index.htm>) への授業公開。次回から受講者は、その日の講義ノート（配布プリント）を自分でダウンロードして、授業に参加すること。
6. 参考文献 → OCWの講義ノートに文献表を掲載する。
7. 休講は文学部掲示板で行う（できるだけ前もってアナウンスする）。質問は、講義終了後、あるいはオフィスアワー（月2、火4）において受け付ける。

<導入>

1. キリスト教の歴史的位置づけ

- ・旧約聖書（ヘブライ語聖書）＝古代イスラエル宗教史から
キリスト教はアジア起源（オリエント起源）の宗教である



- ・ヘレニズム世界におけるキリスト教会の誕生（キリスト教の多様性）
パレスチナ
→①と②
 - ①→ ローマ帝国（地中海世界）
→ ローマ帝国内の二つの領域
東：ギリシャ語文化圏 ギリシャ正教会、ロシア正教会
西：ラテン語文化圏 ローマ・カトリック教会、プロテスタント諸教派
ゲルマン、西欧文化の基盤
 - ②→ 東方（シリア語文化圏へ）あるいはアフリカへ伝播したキリスト教
正教会グループ
エジプト・エチオピア：コプト教会
シリア文化圏 → 中央アジア → 中国 → ?
インド
- ・聖書の宗教（アブラハムの宗教）：ユダヤ教、キリスト教、イスラーム
三つの宗教伝統の比較研究の必要性
西洋の諸思想への影響（マルクス主義の場合）
 - 宗教概念の再検討の必要性
 - 狭義の宗教と広義の宗教

2. キリスト教の多様性と共通性

- ・あまりにも多様、単純な定義ができない
 - ポストモダンの状況：本質主義・実体論への批判
- ・共通性（その起点としてのキリスト教の歴史性）： cf. 仏教
 - 正典としての聖書、基本的信仰簡条、
 - 基本教義（三位一体論、キリスト両性論）
 - これらを核としてゆるやかにつながったネットワークとしてのキリスト教
 - 言語ゲームとしてのキリスト教

<参考文献>

1. ティリッヒ『キリスト教思想史I、II』（ティリッヒ著作集・別巻二、三）白水社
2. 上智大学中世思想研究所編訳『キリスト教史 全11巻』平凡社ライブラリー
3. 金子晴勇 『キリスト教思想史入門』日本基督教団出版局
4. 『岩波 キリスト教辞典』
5. 「キリスト教思想基本文献表」(<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub9.htm>)